

# 春燈

2016  
April

4 月号



主宰の句

安立公彦



古利根や日差を密に冬すみれ

豆打つや身の裡の鬼遣らふかに

ゆく雲のかなた春立つ筑波山

旅びとに春まだ浅き遠嶺かな

茂吉忌や弥栄いまも大和歌

成瀬櫻桃子の句

娘の病ひ負ひゆけ雛流しけり

「春燈」平成七年

ご長女美菜子さんの生来の病を、雛とともに流してしまいたいと思う心情が、切なく伝わってくる。三歳直前の娘を亡くした私は、「逆縁ほど辛いものはない」と櫻桃子先生にお話したことがある。先生は優しく私の心を察して下さった。

最愛の美菜子さんが亡くなられたあとの先生は、まるで蟬の抜殻のようになってしまわれた。

金山雅江

# 成瀬櫻桃子の句

## 木の芽雨ちちのかなしみ子は知るや

『風色』昭和四十八年

私は櫻桃子先生の句集に接する時、何時も一抹の翳りを感じていました。そして長女美菜子さんの障害を知ったのです。先生は天与の宝である美菜子さんの無邪気さに愛惜の情耐え難く、祈りつつ、又「ちちのかなしみ子は知るや」と心に叫ばれ、やがて傷心の中すべてを受け止められて、詩情溢れる俳句になさいました。今は私の忘れられない一句となったのです。

井上正子

# 燈下集



○ 都丸美陽子

再会はかなはぬ夢や梅真白  
ひとしきり途切れし会話風光る  
身の内に棲む鬼のあり節分会  
百地藏百の笑み持て寒明くる  
芽吹く木の声を聞かむと耳澄ます

○ 松山三千江

しあはせな一家族らし初雀  
犬小屋にかたちばかりの輪飾りを  
柔道着にて飛ばす自転車四日かな  
初漁や相州太鼓のみだれ打  
松過の夜風うなじにやさしかり

○ 赤羽陽子

明けてゆく元旦の空さくら色  
階段のきしきし軋む寒さかな  
すつぼりと被つて軽き冬帽子  
公園の時計が鳴つて日脚伸ぶ  
初髪を庇ひて浸る湯舟かな

○ 矢口笑子

世の中を遠くしてゐるマスクかな  
温泉の湯気をゆたかに山眠る  
福笑ひ囃して福をもらひけり  
待春やふいに鳴り出すオルゴール  
玄関の一輪挿しや春隣

○ 太筆を揮ひ命名書初に

初夢のうやむやのまま覚めにけり

杖つくも歩く幸せ女正月

亡き夫は寒がりなりし寒の入

人棲まぬ家を守りて冬紅葉

○ 加藤千春

○ 一灯に一願託し寒詣

三猿の教へ未だに初法話

初鶏の吉事真近き予兆かな

めでたさのあちこちほつる六日かな

粹順の縁起を担ぐ初競馬

○ 大文字孝一

○ 篠原幸子

水仙や母の手鏡もち古りし

折鶴の手順もつるる寒土用

白鳥に住民票とや被災の地

億・兆の数字飛び交ひ一月果つ

日は決めぬ旅の話や春隣

○ 藤原若菜

喪にあけて寧き六日の朝かな

寒鴉吾が真似たるに応へけり

ストツキングに触れて気弱な鎌鼬

冬銀河円周率の果てしなし

そら耳に猫の鳴声冬の夜

○ 和田絢子

冬麗や庁舎の国旗風見せず

生涯の仕事持たざり女正月

凍星や東京遠き空の顔

ポケットに飴入れて出る冬霞

春の潮浪を擡げて陸を恋ふ

○ 神田恵琳

日めくりの一月一日切る淑気

合掌の指間を透くる初日かな

どらえもん夢中に見つむ炬燵の子

待春や眼鏡なつ得まで磨く

たとふれば久女の矜恃寒椿

○ 小山 繁子

寒晴の波に濡れぬる荒岬

風向きの変はれば動き鴨の陣

かたくなに命ひそめむ冬木の芽

寒灯のひとつふたつと過疎の村

つぶやきの声にはならず寒鳥

○ 小島 昭夫

櫛や能に花伝書茶に千家

ころころと缶の転がる二日かな

ぼつかりと空きたる書棚余寒かな (正聲第四版廢棄)

常盤木と朱の神殿や細雪

中七を指折り数ふ探梅行

○ 中嶋 昌子

すれ違ふ香のほのかなり春着の娘

若菜摘むふと浮かびたる万葉歌

灯を入れてかまくら童話の世界かな

日がな聞く安房の潮鳴り野水仙

耕運機置かれ春田の目覚めかな

○ 渡辺 若菜

天平の塔の礎石や冬雲雀

餅花や大黒天の福袋

クロッカス固き日ざしをほどきけり

宮様の手話よどみなき春帽子

ふつくらと煮るがんもどき春隣

○ 西岡 啓子

ふるさとは星につつまれ年新た

七草粥窓いつばいの朝日かな

一声を残して去りぬ寒鴉

束の間のひとりの時間夜半の冬

やはらかき夕空のあり日脚伸ぶ

○ 中村 紀美子

献木のおまたの心志冬桜

初鏡こころの皺はふやさじと

真砂女生家の安房の日和や冬童

春近し坂ゆく人の白き靴

祖母の髪梳きしは遥か日向ぼこ

# 当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

白粥のいのちの香り寒に入る

過ぎ越しし時を温めて日向ぼこ

新しき星座描かむ星冴ゆる

どんど焼筐底の文供とせり

寒北斗仰ぎて遠し閑子の忌

○ 吉村さよ子

微笑みを作り立去る初鏡

神棚のなき家に慣れ嫁が君

日だまりに幣の名残の冬田道

小寒や大道芸の球そるる

春近し鳥影よぎる朝の卓

○ 伊藤百江

住む人のなくている濃き寒椿

老いてなほときめき覚ゆ年賀状

初夢の覚めて恋しき人ひとり

手をつなぎしことなき夫の手套かな

母の齢はるかに越ゆる初湯かな

○ 秋山 葛

寒牡丹ひらききらずに散りにけり

亡骸に娘が紅をさす冬座敷

土になる美納子とゆふに枯木道

落椿不意の別れのありしかな

空に祭あるやも知れぬ牡丹雪

○ 荒井ハルエ

ひび割れの冬田に滲む昨夜の雨

人恋うてラジオつけおく冬の夜

餅花や居間に賑はふ里言葉

枳壳の塩炒豆や初天神

大川の水脈のきらめき春近し

# 春燈の句

安立 公彦選

臘梅の香をひとゆすり明烏

神奈川 宮崎 紗伎

雪降るや診療室の金属音

凍つる夜の目鼻かそけき姫こけし

ゲルニカのをんなの泪冬の月

建国の日を忘れめや古時計

銭洗ふ笄の光も春めけり

梅咲くや祈願の絵馬の輝きぬ

九十年二人三脚豆を撒く

人日や屋敷周りの土竜塚

初風呂や肢体つくづくいとほしむ

書初や昔の杵柄どこへやら

お洒落してホームに急ぐ女正月

七日客田舎しるこの句よき

吹上ぐる潮風しづめ飾焚く

千葉 廣瀬 克子

待春の汀にひろふ貝ひとつ

竹馬の兄に負けじと駈けし日も

しののめの山鳩鳴くや寒明くる

遠富士や利根の対岸春霞

豆を撒く使ふことなき子の部屋も

如月や友の名を消す住所録

多摩川の河口明るし初電車

窓ぎはの鴨のデコイや日脚伸ぶ

星空を仰ぐたのしみ寒四郎

女医さんに脈をとらるる日永かな

偏西風蛇行気儘や春火鉢

母の手に触れて又行く雪まろげ

咲ききつて葉に抱かれぬるシクラメン

鳩に餌を蒔きぬる人や春立ちぬ

千葉 田村 初枝

神奈川 山下 健治

茨城 山崎 刀水



# 余言

安立公彦

五日はな五穀米食ぶよく噛んで (故) 上山 永晃

「はな」は「端」、ここでは物事の始まりと解したい。五日は四日に続いて仕事始めの日。「五穀米」は今では何処の家庭でも常用されている。正月も終わり、食事も常の生活に戻ろうとする思いが、「よく噛んで」に表現されている。作者はこの句を出句した半月あと急逝された。ただ呆然とするのみ。掲出句には病の症状など全く無い。上山永晃という親しみに満ちた名の上に、「故」の一字を付けるのに、如何程の逡巡の時が流れて行ったことだろうか。

紺青の空たまひけりお元日 佐藤 信子

今年の正月は元朝から雲ひとつない晴天だった。大晦日恒例の「行く年来る年」をテレビで見え就寝、朝はいつも通り六時半には目覚める。窓をあけると、紺青の初御空が天空を占めている。ふだんに見上げている空だが、元朝の

この一瞬の空の色は例えようもない。

この句、その元朝の空を、敬虔な思いで見上げる作者の姿をよく表現している。「たまひけり」、「お元日」が、絶妙に打ちつけている。文字通りの元日詠だ。

秩父路や時雨の洗ふ六地藏 吉川 隆

秩父路と聞くと、埼玉県でも奥ふかい盆地の里を思ふ。かつては秩父往還という交通の要所であったところ。現在では、秩父三十四か所観音霊場めぐりがよく知られている。中でも金昌寺は石仏で名高い寺院だ。

この句の「六地藏」は、「六道において衆生の苦患を救う六種の地藏」。「六道」は迷界。次第に言葉の深みに嵌る。この句、秩父という大らかな里の一景として、見飽きない風物だ。「時雨の洗ふ六地藏」が何ともいい。

老いさびに梅一輪の恵みかな 赤岡 茂子

「老いさび」は、「老い」と「さび」の合成語。即ち、年をとり古びてはいるが、その古さに閑寂さがある、という意味であり、作者のわが身を振り返つての謙讓語と言ふべき「老いたわが身」と解したい。みごとに老いである。

「梅一輪の恵み」は、へ梅一輪一輪ほどの暖かさ服部

嵐雪の上五に、慈しみの思いの「恵み」を添え、それがみごとに「老いさび」を受けている。俳句の奥深さをよく表している句と言えよう。因みに作者は九十四歳。

初春や時つなぎゆく大櫛

後藤眞由美

櫛は好きな樹木だ。いつかこの欄で紹介したが、『野田坂造園樹木事典』にはこうある。「小さい葉のやわらかい新緑、夏の濃い日陰、秋の褐色の葉、冬の落葉した枝の美しさ」は、「我国の落葉高木の中で抜群の人氣を誇る」。

この句、その櫛への讃辞を、「時つなぎゆく」と表現している。この中七には、作者の「櫛」への思いがよく溶け込んでいる。折しも早春、空高く伸びのびと育った櫛は、新緑への季節の力を樹間に蓄えているのだ。

空爆へ一続きなる初御空

川崎真樹子

およそ俳句の表現とは考えられない「空爆」の一文字。しかしそれもこの作者の句とすると微妙に十七文字にぴったり合う。それは「一続きなる」のもたらず効果であろう。

日常の新聞に茶飯事の如く見られる中東の戦火。面を覆った兵士たちの一群、瓦礫と化した市街地に立ち登る硝煙。今次大戦を知る人も、知らない人も、その戦火が全てをのみ込む事態は予想できる。しかし私たちの住むこの日本列

島は、新年の初御空を仰ぐ全てのの人に、明るい未来を体感させ得る。考えてみると何と幸せなことだろう。私たちはその幸せを後世の日本に引き継ぐ責務を持つのだ。

水占の吉と浮かびて寒明くる

木村 梨花

「水占」、聞きなれない言葉だ。辞書によると、「水を用いて占うこと、多くは水に影を映し、または水を飲み、或いは水の増減により、吉凶を判断する」とある。

この句、その占いが「吉と浮かびて」とあるから最上の水占が出たのだ。占いというものは、それを信じる人には幸をもたらし、希望を与える。信じない人には、ただの路傍の一景にすぎない。しかし一景の中に何やら「詩情」の漂うのも事実だ。「寒明くる」がそれを示唆している。

寒牡丹菰との日々の寧けしや

溝越 教子

菰の菰の中に冬牡丹の咲く風情は、例えようもなく美しい。へんかんとあめつちはあり寒牡丹 敦。まさに一輪の美、存在そのものが美であると言えよう。

この句、「菰との日々の寧けしや」は言い得ている。冬咲きにするために、夏咲く花芽を摘み取るという、自然の摂理にもとる形で咲かせた寒牡丹、華麗な存在の裡にひそむ孤愁への憐情がほのと浮かぶ。作者は昨年末、古希を記念して画集を上木した。みごとに百花集である。